

芦屋市立認定こども園・保育所

ICT×教育・保育＝

なにがえぞっ?

令和4年度ICT活用実践・考察集 vol.2



市立認定こども園・保育所

ICT活用検討委員会

はじめに

幼児期における子どもの「学び」は、生涯にわたる人格形成の基礎を培う非常に重要なものです。

市立認定こども園及び保育所では、本市における小学校就学前施設の中心的役割を担う市立認定こども園を中心に、現状及び将来の社会状況も見据えた「学び」の推進を実施する中で、GIGAスクール構想や今後の社会におけるICTの重要性に鑑み、全国的にも先進的な幼児教育におけるICTの活用を平成29年度から実践するとともに、市内の幼稚園や保育園に保育実践の場や、学識を招いた研修会も公開し、他の施設とも協同して本市全体の幼児教育の質のさらなる向上に努めています。

幼児教育におけるICTの活用は、子どものICTリテラシーの基礎を育むとともに、人と人の触れ合いや、直接的な体験の重要さの認識にもつながり、双方の要素を取り入れたバランスの良い教育・保育に努めることにより、子どもたちは自信を持ち、夢を持って歩いていくことができると考えております。

市立認定こども園・保育所での取り組みにご指導・ご鞭撻を賜りますとともに、この冊子が、皆様の参考になりましたら幸いです。

目次

はじめに

目次

| | | |
|---------------------------------|-----|----|
| ICT活用に係る目的・理由・方針 | ・・・ | 3 |
| ICT活用実践・考察 | ・・・ | 6 |
| ICT活用に係る研修会 | | |
| ～ ICT活用の意義、効果的な活用等 ～ | ・・・ | 18 |
| ～ “言葉を作る”の支援に～ | ・・・ | 20 |
| 芦屋市立認定こども園・保育所 ICT活用検討委員会協議事項骨子 | ・・・ | 22 |
| ICT委員会「いいねシート」活用事例 | ・・・ | 24 |
| 芦屋市立認定こども園及び保育所 ICT活用検討委員会設置要領 | ・・・ | 26 |
| 芦屋市立認定こども園及び保育所 ICT活用検討委員会委員 | ・・・ | 27 |
| おわりに | ・・・ | 28 |

ICT活用に係る目的・理由・方針

1 目的

ICTの特性を活かした教育・保育活動を行い、21世紀に生きる力の基礎を育む

2 理由

市立保育所・認定こども園では、平成29年度から就学前の教育・保育にICTを保育上のツールとしての活用方法や効果について検討を行ってきました。

その理由は、次のような状況を踏まえたものです。

- ・ 人の生涯に対する就学前の教育・保育が与えるインパクトの大きさが経済学からの評価でも示され、その重要性の再認識
- ・ 次のような、社会状況の急速かつ大きな変化への市立認定こども園・保育所としての教育上の対応
 - ・ GIGAスクール構想による小学校以降の学習環境
 - ・ 社会におけるグローバル化
 - ・ 1つの文脈に対する複数解釈性
 - ・ ICTの重要性のさらなる高まり

こういった状況の中で特に身近でも顕著に表れている「ICTの重要性の高まり」があり、ICTについて検討することを避けて通ることはできないと考え、「ICTを保育活動上の1つの道具とみる」観点を中心にICTの活用を検討することとしたものです。

ICTの活用について検討を行った結果、ICTには保育ツールとして従来のものにはない特徴・特性があり、今後育みたい様々な力の育成に有効なツールであると結論を得ました。

ICTの保育ツールとしての特徴・特性としては、

- ・ 距離的な課題を超えることができる。
- ・ 身近な環境の中では、見たり、聞いたりすることができないことについても可視化し、体験することができる。
- ・ 複数人での活動や、活動結果の共有が容易
- ・ 繰り返し・修正・工夫などが容易

などが上げられます。

これらの特徴・特性は、就学前教育・保育におけるいわゆる「3つの資質・能力」の育成に対し、親和性が高いと考えられますので、ICTを活用した教育・保育の目標を、「ICTの特性を活かした教育・保育活動を行い、21世紀に生きる力の基礎を育む」としたものです。

3 経過

平成29年度～平成30年度 ICT活用に係る協議・検討
令和元年度～ 全市立認定こども園・保育所でのICT活用開始
令和3年度 ICT機器の拡充

4 方針

活動は、対象児童を原則的に5歳児としました。

具体的な活動内容については、4つの市立認定こども園・保育所、それぞれで状況が異なるため、それぞれの状況により検討することとしました。

しかし、子どもがICT環境に直接触れる保育活動を展開し、楽しい体験を通じ、従来にない学びや、より興味関心を深める体験につなげることについては、すべての施設で共有することとし、それらを前提として次の要素については、活動内容に応じ、できる限り取り入れるように努めるものとしてしました。

- ・ 協働性
- ・ 広い意味でのICTリテラシー


これらは、いずれも現在まで保育活動にICTを活用することにより、効率的又は、特徴的に学びにつながるものとして整理したものです。

これらの要素の具体的な保育活動イメージとしては、次のようなものとしてしました。

- ・ タブレットを活用する場合は、1台を複数人で利用すること。
- ・ ICTを活用する中で、子ども達にICTの活用に関わるルールに触れること。

これらの方針により各活動を行いました。

なお、活動中、使用したアプリケーションの概要は次のとおりです。

| 製品名 | 会社名 | 製品概要 |
|------------|---------------|--|
| ピッケのつくるえほん | 株式会社 グッド・グリーフ | タブレットで絵本を作成するもの（音声吹込みや、紙への出力も可）。  ※ アプリ内にあるキャラクターやアイテム（パーツ）を並べて作る。 |

| | | |
|-------|----------------------|---|
| アートボン | 株式会社 スマート デュケーション | 子どもたちの描いた絵を iPad に取り込み、スクリーンに映し出すことで、バーチャルな水族館を作るなどが可能なアプリケーション |
|-------|----------------------|---|

以上

大切に育てたメダカ“あしやめちゃん”をテーマに 世界に一つだけの絵本を作ろう

～「ピッケのつくるえほん」の活用が表現力や創造性を育む～

芦屋市立精道こども園 5歳児

1 活動のねらい

- 大切に育ててきたメダカがビオトープに帰った後の物語を創作することを楽しむ。
- 自分の思いを友達に伝え、友達の思いを受け入れながら、物語を作り上げる充実感を感じる。
- 世界に一つしかない物語を作り、お互いに認め合ったことで達成感を味わう。

2 ICTを活用する意図（ピッケのつくるえほん(以下「ピッケ」という)を活用する意図)

- 実体験したことをさらに広げて絵本を作り、クラスや学年で共有することができる。
- 豊富なアイテムで思いや考えを形にしやすく、何度もやり直しができる点から、絵を描く技量に関係なく楽しめる。
- 文字だけではなく音声も入ることで、紙の絵本とは違う面白さを味わえる。
- 絵本が短時間で完成し満足感が得られ、紙の絵本をじっくり作る創作意欲が高まる。

3 活用機器

タブレット プロジェクター Wi-Fi機器
アプリ(ピッケのつくるえほん) (p4参照)



4 実践

精道こども園開園時から「ピッケ」の取り組みをカリキュラムの中に位置づけており、5歳児になるとピッケが出来ることを楽しみにしている。

10月25日 「お家に帰った“あしやめちゃん”」

1学期から、芦屋市役所のビオトープに住むメダカを増やして帰すために、メダカに愛情をもち“あしやめ”という名前を付け大切に育ててきた。とうとうビオトープにメダカを帰す時が来た。その様子をライブストリーミング[※]で見た時に、「あしやめちゃんがいなくなって寂しいね」「あしやめちゃんがでてくるピッケの絵本にしよう」「それなら、そばにいれるもんね」「いつでも会える!」とたくさん意見が出て、“あしやめちゃん”を主人公にした絵本を作ることになった。どのようなお話にするのか考えると「そうだ!お家(ビオトープ)に帰ったあしや



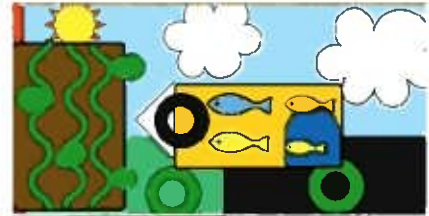
※ライブストリーミング:リアルタイムの映像

めちゃんが、お出かけしていくお話はどうか？」「それがいい！」となる。具体的なアイデアを話し合うと、「あしやめちゃんは車に乗ったことがないから乗せてあげよう」「あしやめちゃん達のコンサートってどう？」等、直前に実体験したことが次々出てくる。

ビックは、保育教諭による教育的配慮に基づくペアで1台のタブレットで作成した。

10月28日 「ひとつしかない特別な車だ」 公開保育～講師 朝倉民枝先生～

A児B児が、“あしやめ”が乗る車について話し合っている。A児「車はこんなのだう？」とアイテムからもつてくると、B児が「いいね」と受け止めながら、「でも水がないと困るんじゃない？」と自分の考えを伝える。二人で考え、A児が「水が入っている水槽の車にしよう」と話し、二人で作る。「あしやめちゃんが困らなくて良かったね」と特別な車ができたことを喜び合う。後日みんなのビック絵本を見合う“ビック映画館”を開催した。



12月 劇遊びで取り組んだ『たつのこたろう』の物語を紙と色鉛筆で実際に制作する

絵本作りの話を聞くと、「それってビックみたいだね」「つくりたい」と意欲的な姿が見られた。作り始めると、劇遊びの場面を切り取りながら4ページの絵本を作り上げた。

＜保育者の読み取りと援助＞

今年度の5歳児は、車の整備士体験、昆虫館へバス遠足、園歌の作曲者による演奏会等、幅広い様々な体験を、積極的に絵本作りに生かし、表現する楽しさを味わった。自分達のオリジナルの作品が出来たことの充実感を得ることができた。

ペアの友達と協同的に絵本を作ることで、工夫したアイテムの使い方や物語の進め方など友達と一緒に考え、取り入れながら共に作り上げていく楽しさを味わうことができた。

5 考察

- ・ 実体験したことを、ビックを使って絵本を作ったことで、今までとは違う新しい方法で表現する楽しさを味わうことができた。
- ・ ペアで1台のタブレットを使うことが、思いを伝え合い、友達の工夫から学ぶことに繋がり、協同的に取り組むことが出来た。
- ・ 「世界に一つだけの絵本」を創り上げた達成感とともに、スクリーンで上映したことで、認め合えたことが実際の絵本作りに自信をもって取り組むことに繋がった。



たのびがそとつ

- ◇ 容易に繰り返し試すことができることで、新たなアイデアが生まれやすく、創造性が育まれる。
- ◇ 絵本を協同的に創り上げた充実感を感じていく過程で、コミュニケーション力が育つ。
- ◇ ビック絵本だけでなく、紙の絵本も作ったことで、より創作意欲が高まる。

自分たちで育てた小豆がほんまに“あんこ”になった！

～ライブストリーミングで給食室に入ってみよう～

芦屋市立精道こども園 5歳児

1 活動のねらい

- 自分たちが知っている食材のルーツを知り、食べるまでの過程を経験する中での気づきから探求心に繋げる。
- ライブストリーミングで普段見ることができない小豆の調理過程を見ることで、食への興味関心を深める。
- 小豆の栽培、収穫、調理、食事などを通して身近な自然に関わり、感謝の気持ちをもって食事を味わう。

2 ICTを活用する意図

- 興味をもったことや疑問に思ったことを、ICT機器を用いて即座に調べることができる。
- 子どもが立ち入れない場所のリモート体験保育ができる。
- 大型スクリーンを使い、友達と同じタイミングでライブストリーミングを観ることで、保育者が伝えたいことを焦点化し、発見した驚きや喜びを共有することができる。

3 活用機器

タブレット プロジェクター Wi-Fi機器

4 実践

精道こども園では5歳児が、毎年みそ作りをする（精道みそ）。原料となる大豆を畑に撒くときに豆にはいろいろな種類があることを知った。子どもたちと話し合い、大豆以外に小豆と四角豆を植えることにした。

8月中旬に小豆を収穫した。「昨日よりも茶色のさやが増えているよ」「もうすぐ豆がとれるかな」と日々観察していた。

9月初旬、さやを剥くと小豆に穴が開いていて「虫が食べている豆がいっぱいある」と気が付いた。



【水に浮かべて小豆を選別】

保育教諭が「タブレットを使って調べてみよう」と言う。しかし、子どもたちは自分達で取り除く方法を考えていた。ただ、膨大な時間がかかることが予測できたので、タブレットで調べることになった。『水に浮かべ浮いた小豆を取り除く』ということが分かり自分たちで「やってみよう」と言い実践した。



【さやから小豆を取り出す】

10月14日 「給食室に潜入！あんこづくりを覗いてみよう」

【あんこを作ってほしいと調理師に依頼し、小豆を調理する過程を保育教諭が給食室に入りタブレットで映す。5歳児は遊戯室に集まり、ライブストリーミングで繋がる。】

小豆を煮る様子を見る。普段給食室をガラス窓から見ることはあるが、大きな鍋や家にはない調理器具の映像を見て「うわー、すごい！」と大きな歓声が上がった。



【プロジェクターで映した映像を見る子どもたち】

小豆を鍋で煮ている様子を見て、子「このブクブクはなに？」調「これはあくってね、これを取ると美味しくなるんだよ」と疑問や不思議に思ったことをすぐ伝え、答えてもらえる体験になった。給食時に「炊いていたあんこがこれなんだね！」と大喜びでいただいた。あんこが苦手な子が「もう一回食べたい。」と話すくらいおいしかった。



《保育者の読み取りと援助》

- ・ 調理師から「子どもからの素直な反応や言葉が聞けてすごくよかった」と声があり、今までとは違い、調理中にリアルタイムで交流ができた。
- ・ 自分たちで小豆の種蒔きから、世話や収穫、豆の選別を実体験し、さらに食べる前の調理の過程をリモート体験して給食でいただくことで『小豆の全て』を、五感を使って豊かな経験をすることができた。

5 考察

- ・ ライブストリーミングの活用で、普段は入ることができない近くて遠い給食室が、子どもにとってより身近な場所になり、食への興味関心が深まった。
- ・ 映像を大きなスクリーンで映して全員が見ることで、見たいところに焦点を絞れ、共感性が高まった。
- ・ 小豆の選別方法を保育教諭はすぐに調べようとしたが、子ども達は自分で考えて解決しようとしていた。すぐにICT機器で調べて答えを出すのではなく、考える機会をもつことが探求心に繋がる。

学びにガスをまつ

- ◇ 精道みそから出発した小豆の保育の中で、本来体験できない調理の過程をリモート体験でき、食への興味関心が深まる。
- ◇ 疑問に思ったことを自分達で考えてからICT機器で調べる。また、見たことのない場所をリモート体験することで探求心が育つ。
- ◇ ライブストリーミングを活用することでより確かな感動体験が共有でき、友達との共感性が高まることで豊かな感性が育つ。

ICTを使ったお面づくり

～運動会の活動を通じて 見て、考えて、やってみよう！～

芦屋市立西蔵こども園 4歳児

1 活動のねらい

- 自分の顔を写真で見えて、パーツを意識しながら顔を作る。
- タブレットの使い方や使用するときの約束事を知る。
- タブレットを活用し友達との交流を深め、してほしいことを伝える

2 ICTを活用する意図

- 一斉に情報を共有でき、思ったことをすぐに伝えられる機会になる
- タブレットで撮影することで、ICT機器の特性を活かしながら、制作に取り組むことができる。また、自分の顔をじっくり見ることができることで、具体的なイメージをもちながら作ることができる

3 活用機器

プロジェクター、タブレット

4 実践

9月初旬「夏祭りってなに？」

夏休みの思い出発表で花火大会の話をしている子が多く、学年全体で映像で見る。子どもたちは、「見たことあるやつ！」と口々に伝えたり、花火が上がる度に「わー！」と歓声を上げたりしていた。花火大会に行かなかった子も興味をもって見ていた。その映像を見た後「花火の近くにあるお店



って知ってる？」と聞くと「綿菓子」「ヨーヨー」「お面」と家庭で経験したことや知っていることを伝えていた。イメージが湧かない子もいたため、プロジェクターを通して実際の写真を見た。大きなスクリーンを見ると「これしたことある」「スーパーボールは夏休みにしたね」とイメージがはっきり出来て、知っていることを伝え合っていた。お店の話をしている時に「チャンチャラランランって踊るやつ」とS児が盆踊りのイメージを手を動かしながら伝えていた。

9月中旬「お面づくり」

以前、お祭りの話をした時に出てきたお面の話をする。どんな時につけるのか聞いてみると「お祭りに行ったとき」「踊るとき」と実際に自分たちが見たものをイメージしながら話をしていた。踊る時につけるイメージがあり、つけてみたい気持ちも強かったため、運動会で踊る「にしくら踊り」の時につけることにした。その話をすると「どんなお面にしようかな」と期待を膨らませていた。今回は自分の顔をお面にすることを伝え、どうやったら自分の顔を作れるか聞いてみた。子どもたちが「(手洗い場の)鏡かな?」「でも手洗う時

に邪魔になるよ」と考える中、Y児が「写真はどうか？」とつぶやく。今回はY児の意見をもとに、タブレットで写真を撮って自分の顔を作ることにした。そこで、タブレット使用時の約束事を伝えた。



① タブレットの持ち方

② タブレットの中の機能で使っていいところ

2人でペアになり、順番に写真を撮っていく。「はい、チーズ」とこっちを見てもらえるように伝えたり、「ここを持った持ちやすいよ」と先に撮った子が次の子に伝えたりしていた。写真を見ながらお面を作っていく時には、切った目や眉毛をタブレットの自分の顔に当てて「うん、この形」「こんな大きさかな」と比較しながら作っていた。タブレット上で写真を拡大することも知っており、「目は何色かな？」とじっくり見て作っていた。

《保育者の読み取りと援助》

- ・ 運動会のテーマ「お祭り」の導入として、プロジェクターを使って映像を見たことで、学年全体でイメージしながらテーマに取り組むことが出来た。実際に映像を見ることで、伝えることが苦手と感じている子どもも、自信をもって積極的に発言していた。
- ・ ICTを使って取り組むことでICT機器に対して興味をもち、より集中して映像を見ることができたことでお祭りに対する興味・関心の深まりを感じた。
- ・ 初めてのタブレット使用時に、タブレットの約束事を丁寧に伝えたことで、タブレットを友達と共有する際は、相手が使いやすいように（渡し方等）タブレットを扱っていた。
- ・ お面作りでは、タブレット機能を使用する機会をつくったことで、ズームで大きくしたりタブレット上に乗せて比較したりと、1つ1つのパーツをじっくり見ることができ、鏡ではできないICT機器の良さを活かしながらイメージをもって作ることができた。

5 考察

- ・ 経験の有無を補うために映像の視聴はイメージの共有に有効的。映像があることで発表が苦手な子どもも自信をもって発言できることがわかった。
- ・ 鏡だと顔が動いてしまったり、近くで見ることが難しかったりするが、自分の見たい部分をズームし具体的にみる事が出来るというタブレットの特性を活かすことで興味・関心が広がると感じた。
- ・ 友達同士で撮り合うことで、次の子が持ちやすいように持ち方を伝えたり、顔がしっかりと映るように声をかけたりと、自分が経験したことで友達への思いやりの気持ちや言葉も生まれた。



なにがよかった？

- ◇ タブレットの特性を活かしたズーム機能やカメラなどに実際に触れながらICT機器を使用することで、ルールや知識を身につけ、また使いたいという意欲に繋がった。
- ◇ 全員で映像を見ることで、イメージを明確にもつことができ、知っていることを伝えたいという意欲や感じたことを発言する力、友達の話に耳を傾ける力が養われた。

にしくら水族園

～思わず心が動き出す みつけて、かんがえて、やってみよう 実体験×ICT～
芦屋市立西蔵こども園 5歳児

1 活動のねらい

- 友達とイメージを共有しながら、力を合わせて遊びを進める達成感を味わう
- ICT機器を使って、遊びが発展する楽しさを知る
- 友達と互いに作品を見合いながらプレゼンテーションをし、友達の良いところを見つける

2 ICTを活用する意図

- 生き物の大きさや動き方など図鑑ではわからないものを映像で見ることで、イメージの共有につながり、活動に対してより興味や関心を深めていけるようにするため
- プレゼンテーションを通して、自分の作品の工夫した所や頑張った所を、自分の言葉で伝える力をつけるため

3 活用機器

タブレット プロジェクター アプリ (K i t S 「きつつ」
アートホン (p.5参照))



4 実践

5月下旬 「自分が描いた生き物が動いている！」

海に散歩に出かけ、魚やカニ、クラゲ等海の生き物を見て、触れたことで海の生き物に興味が出る。そこで、「アートホン」を使って専用のワークシートに塗り絵をしたり、オリジナルの魚を描いたりして、友達と協力をしてタブレットで作品を撮影する。初めて写真を撮ってアプリの中に取り込む時、ヒントを合わせることや、片手でタブレットを持って自分で撮ることは、子どもにとっては難しかったため、友達に持ってもらいながらシャッターを押すようにした。また、自分の作品について皆の前に一人ずつ出て、頑張ったことや好きな所をスクリーンを使ってプレゼンテーションした。



6月上旬 「にしくら水族園(水族園ごっこ)」

近隣の海や川に触れる中で、そこに潜む生き物に興味を持ち始め、水族園ごっこをすることになった。実際に見たことでイメージが膨らみ、主体的に生き物を制作する姿も見られたが、一方で名前は知っているけれど見たことがない生き物は、イメージが難しく、知っている子どもが教えたり図鑑を見たりしながら進めていった。さらに生き物の大きさや動き方など、図鑑ではわかりづらい疑問が子どもたちから出てきた為、タブレットを使って実際に映像をみてイメージの共有につなげた。



7月中旬 「使ったペットボトルをリサイクルしたい！」

水族園ごっこで使用した材料を「リサイクルできないのかな」と子どもたちから提案があり、コープ浜芦屋店のリサイクルボックスに持っていく。すると、お店の方が詳しくリサイクルの話をしてくれる。環境処理センターに持っていくと回収をしてくれるという情報を聞き、持っていくことになった。しかし、当日は天候が悪く足を運ぶことが出来なかった為、担任が代表で現地へ行き、ライブストリーミングで交流し施設見学をすることになった。環境処理センターの職員の話をお聞かせもらい、子どもたちが疑問に思ったことを質問し、地域の人とつながる活動になった。

ペットボトルのラベルを剥がし、種類別に分類するところや、ゴミを燃やすところなど、具体的に見せてもらったことで、疑問が納得へと変わった。子どもたちが関心をもち、家庭でも主体的にリサイクルに取り組むきっかけとなった。



《保育者の読み取りと援助》

- ・ タブレット使用時に、「みんなで」「チームで」と子どもたちに課題を伝えたことで、友達と工夫して考えながら協力しようとする姿に繋がっていった。またプレゼンテーションでは、自分の作品を撮った写真が友達に認められ、自信となっていった。
- ・ 図鑑だけでは知り得ないことは、タブレットを使って同じ映像を見ることで興味が深まり、イメージの共有に繋がった。また、友達と一緒に大きな作品を作る意欲に繋がった。
- ・ 子どもたちからの発信を受け止め、本来なら雨天中止になるところだったがICTを使ってライブストリーミングしたことで、SDGsのことを主体的に考えるきっかけとなった。

5 考察

- ・ 個人でタブレットを使って遊ぶのではなく、友達と一緒に使うことで「ストップ」「もうちょっとこっち」などやりとりがたくさん聞かれ、子ども同士で考え合う姿に繋がった。
- ・ イメージがわきにくい子どもや生活経験が少ない子どもに対して、みんなで映像を見てイメージを共有することは、活動が意欲的になったり、意見が活発に出たりするきっかけとなり効果的だった。
- ・ 言葉のみの発表ではなく、映像を通して視覚的に伝えたことで、見ている側の興味や関心が深まり、友達の良さを見つける機会となった。

子どもが思った？

- ◇ ICT機器を活用することで、見てほしいところや見たいところが明確になり、友達と考えたことや感じたことを活発に伝え合うことができる。
- ◇ ICT機器を使って気軽に地域の方と交流することが可能となり、その中で得た知識をすぐに自分たちの生活に活かそうとする意欲が芽生える。

みんなで考え、みんなで伝えあう ICT

～いいこといいものを見つけよう！ひろめよう！～

芦屋市立岩園保育所 5歳児

1 活動のねらい

- 発見したことや考えたことを言葉で伝える力や、友達の話聞く力を育む。
- ICT機器を使うことで、できること・やってみたいことを子どもたち自身で考える。

2 ICTを活用する意図

- 日中見られない夜間のカイコの姿を見て、愛着を感じ、興味関心を深める。
- プロジェクターを使ってクラス全員で同じ場面を共有し、サークルタイムでの話し合いを豊かにする。

3 活用機器

タブレット プロジェクター ファイバースコープ※

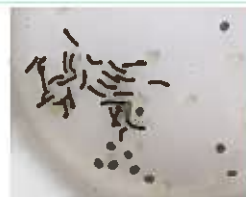
※ファイバースコープ＝高倍率で拡大して見ることができるデジタル顕微鏡



4 実践

5月下旬 「カイコが生まれた！」

カイコを飼育し日々観察する中で「まだ生まれていない卵がある」と気付くと、「グレーの卵から出てきたら(卵が)白くなるんじゃない？」と予想した。そこで保育者が、前日夜の間タイムラプス機能で卵を撮影した動画を見ることにした。卵から出てくるところをゆっくり再生すると、「卵から頭が出てきた」「カイコがびょんって出てきて、横向いていた卵が縦になった」「出てくるときに蹴飛ばしたみたい」と次々に気付きが生まれる。「生まれる前、カイコは丸まっていた」「卵の中は狭いから丸くなるんだよ！」と友達の発見からさらに考える姿が見られた。



※タイムラプス機能＝一定間隔で撮影した静止画をつないでコマ送りの映像を作る機能

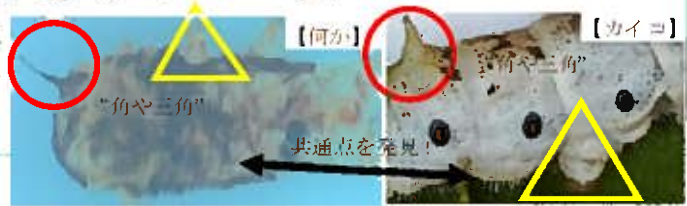
《保育者の読み取りと援助》

- ・ カイコが卵から生まれたことを喜ぶ子どもたちに、生まれる瞬間を見せることでさらに親しみが増すと思い、夜間の動画を撮影した。予想を超えて子どもたちは、すぐに卵の向きや生まれる様子の細かい変化に着目した。
- ・ 昨年度よりICTを使って蝶への探求心を深めてきた経験が繋がっていると感じる。これからもICT機器を継続的に使用し、子どもたちがそれぞれの機能の特徴を知り、自分達で活動に取り入れようとする姿に繋げていきたい。

6月3日 「これってなんだろう？」

毎日のお世話の中で「何か昨日より増えている」と箱に付着した【何か】に気が付いた。そこでファイバースコープを使って【何か】を拡大して見る。「針みたいなものがある」「三角になっている」と細部まで見えたが、「違う虫が入ってきた？」「カイコの抜け殻なのか？」と意見が二分した。

そこでカイコの体もファイバースコープで見る。すると体の特徴が明確になってカイコの足の形が“三角”だと分かり、【何か】で見つけた“三角”は足があった部分なのではないかと考えた。また、“針みたい”に見えたものに似た、尖ったトゲのようなものが、カイコのお尻にもあると話し、箱に付着していた【何か】は「カイコの抜け殻だと思う」という結論になった。



《保育者の読み取りと援助》

- ・ カイコの成長と共に抜け殻も大きくなり、よく見えるようになったことで、子どもたちの発見に繋がった。ICT機器を活用してカイコと抜け殻を比較すると、形の特徴が似ている共通点に気が付き、カイコの抜け殻ではないかという結論に至った。

6月21日 「ゆっくりも見てみたい！」

カイコが繭を作り始め、タイムラプス機能で撮影して見ると、「早送り(タイムラプス撮影)じゃないものも見たい！」と子どもたちの声があがり、ビデオ撮影をしたものを見る。初めは真剣に見入っていたが、少しずつ見続けることに疲れてきた様子。9時間続くことを伝えると「ちょっと早送りして」という要望があった。早送りしながら見ると、糸の出し方や繭を作るときに尿を出すこと、カイコが小さくなること等様々な気づきがあった。早送りもしながら全て見終えると「見られて嬉しい！」「こんなに頑張って作った繭だったんだ！」と感激していた。

《保育者の読み取りと援助》

- ・ タイムラプス機能を使って、何度もカイコを見てきたが、タイムラプスの動画では自分達の見たい場面も見逃してしまうと思った子どもたちは、ゆっくり撮影すれば見ることができると気付いた。
- ・ 初めて長時間の動画を見ると、カイコに対する気づきとともに「9時間は長すぎる」「(繭作りは)時間がかかる」とタイムラプスでは感じられない、実際の時間の長さも感じる事ができた。時間の長さを知った子どもたちだからこそ、「早くしてもさっきなかった糸が見える」と早送りで見る際も着目点に気づき、比べるところを考える事ができた。

5 考察

- ・ タイムラプス機能やファイバースコープで観察したり、タブレットで観察写真を撮影したりしたことで、カイコへの愛着が深まり継続的な活動になった。
- ・ ICT機器を身近に感じ始め、「これもファイバースコープで見たい」「このカイコを写真に撮りたい」「夜のカイコを撮ってほしい」と、自分が知りたいことと、知るための手段を考え、子どもたち自身で“やってみたい”発信をするようになってきた。
- ・ 子ども自らが発見したり予測を立てながら観察したりすることで、図鑑や保育士から答えを知る以上に知る喜びを感じることができ、さらに伝えたいと思う気持ちが強まると考える。

子どもが

- ◇ 同じ瞬間を見ることで、話し合いの場が活発になり、友達の話しを聞く力や、自分の考えを伝え合う対話力が育つ。
- ◇ 知りたいことに合ったICT機器の使い方を自己判断し、発信する力を育む。



“びわまる” 出港！！

～観て・知って・感じて 広がるイメージ～

芦屋市立緑保育所 5歳児

1 活動のねらい

- 漁の映像を観て、ニシン漁に関心をもつ。
- イメージをもちながら、友達と力を合わせて踊ろうとする。
- 踊りだけでなく、船や旗にも思いが込められていることを知る。

2 ICTを活用する意図

- 実際に見たり触れたりすることが難しいものを観ることができ、イメージを共有できる。

3 活用機器

タブレット プロジェクター

4 実践

8月18日 「魚ってこうやって捕るんだ」

運動会に向けてソーラン節を踊り始めるが、背景にあるニシン漁を実際に見たことがなく、踊りのイメージがもちづらい姿が見られる。網を引くとは実際どうしているのか、そもそも魚をどのように釣るのかという疑問が子どもから出てきた。そこで、実際に網を用いたニシン漁の映像を観る。



ニシンが揚がる場面を観て「かごの魚いっぱいやな！」「重そう」と驚く声が多い。映像を観たことで、漁師は“魚を捕りたい”という気持ちがある一方で、魚は生き残るために必死に逃げるということに気づく。漁には想像以上の力が必要だと知り、その後ソーラン節を踊ると「こんな力じゃイカしか釣れへん」「筋肉使って腕が痛くなってきた」と漁のイメージと繋げて踊る姿が見られる。

《保育者の読み取りと援助》

- ・ 漁＝魚を捕ること＝竿で釣るという概念をもっている子どもが多かったが、実際に漁の映像を観ることでソーラン節のイメージが広がったと感じた。
- ・ 映像で観た漁の様子と実際の踊りを関連づけられるよう、踊っている時に「遠くまで網を投げて！」「力こぶができるくらい重たいよ」と声をかけることで、子どもなりにイメージをもちながらこれまでで最も意欲的に踊る姿が見られた。



8月23・24日 「名前がない！名前をつけよう」

漁師が大きな船に乗り、力を合わせて魚を捕っていることを共通理解した子どもたち。漁をするための船や大漁旗に込められた思いも知ってほしいと考え、船にはどのようなものがあるか問いかける。すると、「船(タブレットで)見たらいいやん！」と声があがる。実際の船の写真を見て、船には自分の船であることが分かるように名前がつけられていたり、大漁旗には魚がたくさん捕れるよう願いを込めて魚の絵が描かれていたりすることを知る。



そして、自分たちの船に足りないものは何かを考え、A児が「名前つけないとあかん！」と気づく。グループで話し合うと思いつきに名前の候補が上がり、グループ毎に決めた名前を発表する。その中から「びわぐみ全員が乗る船だと分かる名前がよい」、「長い名前は言いにくくわかりづらいこと」等を考えて、「びわまる」に決定した。

《保育者の読み取りと援助》

- ・ 繰り返しタブレットを活用する中で、子どもたちにとって知りたいことを知る1つのツール=タブレットとして考えるようになってきていると感じた。
- ・ 実際に大漁旗や船の写真等を見ることで、船に思いが込められているということを知り、自分たちの船への思いも強くなることに繋がった。



5 考察

- ・ 映像を集中して観る姿や、イメージをもちながら意欲的に踊る姿から、視覚的な情報は子どもにとって影響力が大きいと実感した。そのため、鑑賞する映像は、子どもの興味や知りたいことを保育者が見極めて選択することが大切であると感じた。
- ・ この事例では、ただ映像を観るだけでなく、実際の遊びへと繋げることでより遊びが深まった。踊る時には、映像から具体的なイメージをもつことで子どもの表現が変化した。また、その表現を保育者や友達から認められることで自己肯定感の育ちにも繋がったのではないかと。
- ・ グループでの話し合いでは、子ども同士で共通のイメージを明確にもっていることから、進んで発言する児も多く、話し合いも進みやすかったと考えられる。

やまにがそなつ？

- ◇ 実際に見ることが難しい題材を写真や動画等で観ることでイメージを共有でき、発見したことや考えたことを積極的に発言する力や、友達と伝え合う力、協調性が育つ。
- ◇ 写真・映像を通してソーラン節の由来や背景の理解が深まることで、想像力を働かせながら自分たちで表現することの喜びを味わい、お互いに表現を認め合うことによって自己肯定感が育まれる。

ICT活用に係る研修会

令和4年度 第1回ICTを活用した教育・保育研修会

「幼児期の教育・保育におけるICT活用の意義、効果的な活用及び気をつけること」

日時 令和4年6月24日（金） 午前9時45分～午前11時30分

場所 精道こども園

講師 関田学園女子大学 人間教育学部 児童教育学科 堀田 博史 教授

ICT活用の意義や効果

1 ICTがもたらす利点

- 子どもが楽しいと感じるために
 - ・ 保育者側からの指示ばかりではなく、子どもから出たアイデアを生かす。
 - ・ 保育者側が制約を付けてルールを閉ざしてしまうと、子どもからのアイデアは出にくくなり楽しさを見いだせない。
- 制約をつけない
 - ・ 小学校では制約を付けずに使っていると、人のIDで入ったりSNSにいたずらの書き込みをしたりすることが懸念される。しかし、先生は生徒がそういうことをするのは想定内だと考える。大切なのは問題が起こった時にみんなで話し合い解決すること。
 - ・ 制約をつけないからこそ子どもたちから自然とICTを用いたアイデアがでてくる。
〈例〉 生徒会の選挙にタブレットを使いライブ中継をしたい



子どもたちからアイデアが出てきたときに、ICT活用が成功したといえる。

- 少子化が進み人口が減る時代に子どもが生きていく世界で、児童生徒に求められる力

- ① 読解力や情報活用能力
- ② 教科固有の見方・考え方を働かせて自分の頭で考えて表現する力
- ③ 対話や協働を通じて知識やアイデアを共有し新しい解や納得解を生み出す力

- 保育者に求められる力
 - ・ これまでも幼児教育の中で子どもたちから出たアイデアや思いを受け止め、みんなの前で披露してきた。ICTを用いた保育の中でも同様にすることが必要
→ 保育者が疑問を投げかけ、その疑問に対して子どもたちが問いをもつことが大切
- 子どもが問いをもつということは〈旭山の幼稚園が遠足に行った事例より〉
 - ・ 園で飼育しているウサギの耳が長い、目が赤いことに疑問を持つ⇒旭山動物園の飼育員さんに質問することになった⇒もっと身近な動物でも不思議なことがないか話し合うとたくさん不思議が出てきた⇒実際に行ったときに飼育員さんに質問した⇒園で振り返りをしプレゼンテーションを行った。

子どもたちが疑問に感じたことをインターネットで調べ、かつ実体験を通すことでさらに興味・関心が膨らみ、学びが深まった。

続けることでICTはもっと価値のあるものになっていくのではないかな？

2 応答性のある環境

- ICT活用の効果的な使い方→普段、容易に行けない遠方とテレビ電話を繋げる。

〈小学5年生自動車メーカーとテレビ電話した事例〉

社会の自動車づくりの授業。最後の授業の終わりが未来の自動車を自分たちで想像してプレゼンする。子どもたちはたくさん想像して考える。車のメーカーの方がテレビ会議に入ってくれて評価する。先生が評価するだけと違い、専門の人から「2年後に実現するかも」と聞くと目を輝かせて喜び、更にアイデアが出るようになった。

☆ コロナ禍の状況もあり専門家の方が手厚い対応 → 協働するという応答性のある環境が整いやすい。

ICTは写真や動画を撮り、見るなどの記録用としてのイメージ

↓
タブレットから人が出てくるみたいな体験をする

↓
アメリカに行った友達につなげたいと子どもからアイデアが出る



ICTを用いた保育による子どもたちの体験の多様性(いろいろな体験をすること)が、社会を生きていくひとつのきっかけになる。

- 注意すること
 - ・ 保護者にクラスだよりや園だよりで発信が必要。情報発信を常にしていく。
 - ・ プライバシーポリシー・個人情報の取り扱いについて、保護者に伝えること。
- 最後に…乳児期のICT保育について
 - ・ 1歳児に対し、タブレットを活用することについて質問があった。
 - 4、5歳から活用していくといいのではないかな。理由として
 - ・ 人との関わりが大切な時期。
 - ・ 映像が直接的に入ってきてしまう。現実と非現実の区別がつかない。

以上

ICTを活用して子どもたちの表現力を育む ～“言葉を創る”の支援に～

開催日時 令和4年10月28日(金) 午前10時30分～午前11時15分
午後 1時30分～午後 2時45分
講師 朝倉 民枝 氏(株式会社グッド・グリーン 代表取締役)

<精道こども園の5歳児の保育より>

- ・ 実体験とファンタジーの融合とは
子どもは、豊かな実体験とファンタジーな世界を日頃から行き来している。
⇒ 真剣にその世界に入り込んだ経験を「ピッケ」の活動を通して絵本で表現する。
- ・ 主体性がみられる保育
子どもたちの気づきをもつ。紙の絵本を見せて、ピッケとの違いを考える。
※ ピッケ絵本は文字を入れることもできるが音声絵本にもできる。
録音した声を聞いて「聞こえにくかった」⇒「周りがうるさいと聞こえにくい」
⇒ 「となりの(誰もいない)部屋でやったらいい」
⇒ 誰もいない部屋に行き3人で録音してくる⇒「さっきより聞こえた」
- ・ 絵本を友達と協力して作る場合、教育的意図のあるペア活動は「子どもを信じて任せる」こと
⇒ 子どもをよく見る。気持ちに寄り添う。
- ・ 準備と場づくりがしっかりできていた。これまでの経験と子どもへの信頼。

<お話づくりの概要>

- ・ 先生たちの世代は、たくさんの絵本を読んでもらっている。お話を「目」で見て「耳」で聞くだけでなく、「どんな声」「誰に」「どこで」なども加わり、幸せな「読んでもらう体験」
- ・ 大人の手を借りなくても、ICTの助けを借りて、絵本が作れる。
- ・ 身体ポーズをインタラクティブ(相互作用・対話的な・双方向などの意味)に変更。例えば「顔」は単純に正面向きで顔の表情が選択できる。
- ・ 根拠なく大丈夫という心の安全基地⇒幼いころにたくさんの「うれしい」「楽しい」を味わう。
⇒ 言葉は物語を創る。夢中になる。
- ・ 「創る」は自分から取り組む。あらゆる学びが詰まっている。
- ・ 楽しい学びの副次的効果として・言語能力・思考力・判断力・表現力が高まる。生来の力を信じて伸ばすための支援である。
- ・ このアプリには「子ども自身に気づいてほしいこと」をあえて入れていない。

<自身のオリジナル教材創り>

- ・ 家で地震が起きた時の絵本を作成
- ・ マイノリティの子どもたち 外国にルーツのある子どもとその保護者に向けて。日本の言葉や文化に親しむと同時に、母国の言葉や文化に誇りをもつような取り組み。副次的に日本語力もアップする。
- ・ 入院中の子どもたちへ、院内学級へオンラインで。楽しいことが様々な気持ちを開放する。疎外感が和らぎ、前向きな気持ちへ
- ・ 絵本づくりのワークショップ
子どもは、いろいろなことを思い出す力がまだ足りない。
→ 子どもと、親や教師の2項関係では大人が主導
→ 絵本（ものがたり）を入れての3項関係に
→ いろいろな形のアイテムを使った豊かに表現
※ 「初めて作った」「一人で、自分で作った」ワークショップでの子どもの言葉

<ICTを導入する意味>

- ・ スマホもタブレットもある中で育つ「デジタルネイティブ」の子どもたち
- ・ 家庭ではデジタル機器の消費者になり、家庭任せでは格差拡大の恐れ
- ・ 子どもがデジタルの「消費者」としてだけではなく、「創る」と出会い
- ・ デジタルメディアに「創る」で出会わせたい。最初の出会いを「ひなたの匂い」に
- ・ SNSでのいじめ（スクールカーストの上位の子どもが使う）が起きてから指導している現実。表面上は収まっても、より奥深いところに潜んでいく。「創る」というそもそもの使い方へ
- ・ 言葉は・・・内へ：人の内面を創る。人の土壌を耕す。外へ：人とつながる。社会とつながる。
- ・ 絵本の読み聞かせ（インプット） + 物語創り（アウトプット）⇒豊かな言葉
- ・ 素敵なデザインをする場。言葉と物語を楽しむ力 ⇒ 「生きる力」
- ・ 子どもたちが本領を発揮して、幸せに生きてほしい。

以上

第1回 令和4年4月23日 午後4時～

- 1 ICT活用の目的
 - ・ 子どものより良い学び・育ち
 - ・ 今後の社会状況を見据えた先進的取組
 - ・ 市立保育施設としての役割
- 2 経過
- 3 検討内容・項目
 - ① 研修に関する協議
 - ② ICT活用に係る年間計画
 - ③ 各施設のICT活用に係る共有
 - ICT活用に係る課題・課題解決方法の検討
 - 公開保育に係る共有
 - ④ 活動報告冊子の作成
 - ⑤ 次年度活動に関する検討
 - その他
- 4 今後のスケジュール

第2回 令和4年6月3日 午後3時30分～

- 1 各施設でのICT活用の目的の共有
- 2 ICT研修の持ち方・聞きたい内容
 - ・ 実践事例、アプリ
 - ・ ICTを活用する意義
 - ・ 文部科学省におけるICTについて
- 3 昨年度の冊子の感想の報告

第3回 令和4年7月4日 午後3時30分～

- 1 年間計画からICT保育事例の共有
 - ・ 岩園保育所…タブレットでの撮影、所内の自然マップ作成、
ファイバースコープでの自然物の観察、タイムラプスを用いた蚕の撮影
 - ・ 緑保育所…プロジェクターで全国のこいのぼりを見る、タブレットでの栽培物の撮影
- 2 ICT公開保育の報告
 - ・ 精道こども園…「園歌 de 遊ぼう」大作戦の取り組み
 - ・ 西藏こども園…「にしくら水族園」の取り組み
- 3 いいね！シートを用いたICT保育事例の共有（その後第6回の委員会まで同様に共有）
- 4 ICTを保育にどう活かすか

第4回 令和4年8月30日 午後3時30分～

- 1 冊子作成について構成の検討
- 2 関西ICT展・保育博の報告
 - ・ 待機児童について
 - ・ ICT活用による業務効率化について

第5回 令和4年9月22日 午後3時30分～

- 1 ICT所内研修の報告
 - ・ 緑保育所…ソーラン節の取り組み
- 2 冊子作成について具体的な構成(掲載内容、担当等)の検討

第6回 令和4年10月27日 午後3時30分～

- 1 関西ICT展・保育博の報告
 - ・ 保育のICT活用について
- 2 アプリの追加についての検討
- 3 冊子作成についてのスケジュールの確認

第7回 令和4年12月19日 午後3時30分～

- 1 冊子作成について内容の検討
 - ・ 表紙
 - ・ 議事骨子
 - ・ いいね!シート
 - ・ 講話記録
 - ・ ICT活用検討委員会委員一覧
 - ・ 実践報告

第8回 令和5年1月26日 午後3時30分～

- 1 冊子作成について内容の検討
 - ・ 実践報告

第9回 令和5年2月24日 午後3時30分～

- 1 冊子作成について内容の検討・最終確認
 - ・ はじめに
 - ・ 研究主題
 - ・ おわりに
- 2 次年度のICT委員会について

令和4年度 ICT委員会 【いいね！シート】

「いいね」と思ったICT機器の活用方法をワンポイントでまとめてみました！

| | | | |
|---|--|--|------------------------------------|
| 精道こども園 5歳 10月12日(水) | | 精道こども園 全学年 9月13日(火) | |
| 育てたい力 | ・ピッケの操作方法・友達と発見する喜び ・これから取り組むことへの期待感 | 育てたい力 | 防災意識 |
| そのICT機器を選んだ理由 | わかりやすい みんなで取り組める | そのICT機器を選んだ理由 | どの学年にもわかりやすく見えやすい |
| 活用機器 | タブレット ピッケアプリ | 活用機器 | タブレット プロジェクター |
| <ul style="list-style-type: none"> 初めてピッケに触れる。去年年長児がしていたことを覚えており、期待して取り組む。 大きくしたり小さくしたりするだけでなく、色や形を変形させることを知り、子どもの表現が広がる。 友達と一緒にすることでいろいろな操作方法を知り、形作る楽しさを共有する。 保育教諭の指示をあえて少なくすることで、子どもが自由にタブレットに触れ、操作する楽しさと、友達と一緒に発見する協調性を育む。 | | <ul style="list-style-type: none"> 防災訓練で大雨特別警報が発令されたことを想定して避難訓練を行った。2階へ避難した後で話をする際、良い例と好ましくない例を劇にしながらイラストを見ることで、普段見たことのない光景をイメージする。 実際の被害の写真や動画は強い刺激になることもあるため、イラストを使用した。劇だけではどんな状況でそうなるのかわからないこともある。また参加する園児が0歳児から5歳児と年齢の幅が広い時は、視覚的なものがあるとイメージを共有するのに効果的。話をよく聞き考えていた。 | |
|  | |  | |
| 西蔵こども園 5歳 7月15日(金) | | 西蔵こども園 4歳 9月21日(水) | |
| 育てたい力 | リサイクルに対する興味・関心を深める /自分でできることを考え、身近な人に伝える | 育てたい力 | 顔の観察をしてパーツを知る |
| そのICT機器を選んだ理由 | 当日天候が悪く、芦屋市環境処理センターへ行けなかったため、リモートで交流、施設見学をすることになった | そのICT機器を選んだ理由 | 友達に撮影してもらうことで自分の顔のパーツ1つ1つをじっくり見るため |
| 活用機器 | タブレット | 活用機器 | タブレット |
| <ul style="list-style-type: none"> 水族園ごっこで使用した廃材を「リサイクルできないのかな」と子どもたちが提案し、環境処理センターへ持っていくことになった。しかし、当日は天候が悪く足を運ぶことができなかったため、リモートで交流し施設見学をすることになった。環境処理センターの職員の話聞き、子どもたちが疑問に思ったことを質問し、園外の人とのつながる活動になった。 リモートでペットボトルのラベルを剥がし種類別に分類するところや、ゴミを燃やすところを見せてもらうことで、色々な学びに繋がった。また、燃やした灰が海に埋立てられ海の面積がどんどん小さくなっているという現状を知り、海の生き物を守るために自分たちができることを考え、家庭でもリサイクルに取り組む姿が見られた。 | | <ul style="list-style-type: none"> 初めて子ども達がiPadを取り扱う取り組みだったので、持ち方や撮影の仕方等、使い方の共通確認をすることができた。 自分の顔の壁面づくりをする為に、iPadで友達と顔の撮り合いっこをすることで、撮り方を教え合う姿が見られた。自分の顔の写真を見ながら作る時に、画面を拡大して目の色を確認したり、画用紙を切った眉毛を画面に合わせて比較したりすることで、「もうちょっと下かな」「こんな色だったんだ」と新たな発見をする姿が見られた。鏡ではできないiPadならではの取り組みだった。 | |
|   | |   | |

| | | | |
|--|------------------------|---|--------------------------|
| 緑保育所 5 歳 8月3日(水) | | 緑保育所 4歳 10月25日(火) | |
| 育てたい力 | コミュニケーション、友だち(異年齢)への関心 | 育てたい力 | 自分なりにイメージを膨らませて想像の世界を楽しむ |
| その ICT 機器を選んだ理由 | 自分や友だちを客観的に見ることができる | その ICT 機器を選んだ理由 | 自分の作品が動く様子を見ることができる |
| 活用機器 | タブレット・プロジェクター | 活用機器 | タブレット・プロジェクター・アートボン |
| <ul style="list-style-type: none"> お祭りごっこを開催した際に、自分のお店に来てくれた他クラスのお客さんや、お客さんがお祭りを楽しむ様子を子どもたちがタブレットで撮影し、それをプロジェクターで見返すことで、「これ誰?」と、名前を知らない他クラスの友だちがいることに気づく。 「どうしたら誰か分かるかな?」と保育者が投げかけると、以前自分たちで撮影して4・5歳児で「お友だちボード」を作成したことを思い出し、「(他クラスの分も)お友だちボードを作ったらいい」と子どもからの発信があり、作成することになった。 ICT 機器を春に自分たちで活用したことによって、同じような場面になった時に応用して活用できるということから、子どもの学ぶ力に驚いた。  | | <ul style="list-style-type: none"> 散歩で拾ったドングリを使って、顔や服を貼り一人ひとりドングリちゃんを作る。そのドングリちゃん、ドングリ転がしをしたり自由遊びの中で人形にして遊んだりして親しむ中で、自分のドングリちゃんに名前を付けたり、生き物のように気持ちを寄せたりする姿がある。そこで、子どもたちの降所後にドングリちゃんが保育所で何をしているのかを見るという設定で、ドングリちゃんの写真を取り込んでアートボンを行う。 自分のドングリちゃん映った時に子どもがその場で立って発表する時間があることで伝える力が育つと感じた。 友だちの前で保育者に自分のドングリちゃんを認められることで自己肯定感にもつながると感じた。  | |
| 岩園保育所 4 歳 8月16日(金) | | 岩園保育所 5 歳 10月21日(金) | |
| 育てたい力 | 飼育物への興味関心を深める | 育てたい力 | 深める楽しさをしり、より興味を持つ |
| その ICT 機器を選んだ理由 | ザリガニのからだを観察しやすくするため | その ICT 機器を選んだ理由 | 図鑑と照らし合わせるため |
| 活用機器 | タブレット | 活用機器 | ファイバースコープ、プロジェクター |
| <ul style="list-style-type: none"> 保育士がザリガニを連れてくると、本棚のザリガニに関する本を集め、子どもたちは興味津々だった。しかし、ザリガニを触ることには抵抗があったため、ザリガニの性別を調べられるよう、ザリガニの写真を撮った。 撮った写真と図鑑の写真を見比べることで「このザリガニはメスだ!」「お腹に穴が2つある!卵を産む穴なんだって!」と確認することができた。また「こっちの穴はなんだろう?」と尿の出る穴についても興味を持ち、みんなで調べることになった。 動きの多い生き物だが、静止画にすることでじっくり確認することができた。 <p>ザリガニについても詳しくなりつつ、子どもたちと一緒にザリガニのおうち作りをし、世話をし、世話を楽しむことで愛情を持って育てている。</p>   | | <ul style="list-style-type: none"> 10月から何の野菜の苗か伝えずに芽キャベツを育て始めた。調べても答えは分からず世話をし続けていると、葉に虫(モンシロチョウ)の卵がついていた。 「何の卵かな?」と投げかけると、「今日近くにモンシロチョウがとんでいた!」「モンシロチョウならキャベツが好きだよ!」と予測し、モンシロチョウとキャベツを調べることになった。 図鑑で調べると似ていることが分かり、葉から卵と幼虫を取ってファイバースコープで見た。図鑑の写真そっくりな卵を見ることができた。 幼虫が動いている姿から「もし野菜がキャベツで合っていたら生まれてきた幼虫に食べられちゃう!」と卵をカゴに集め、答えが分かるまで育てることにした。   | |

芦屋市立認定こども園及び保育所ICT活用検討委員会設置要領

(目的)

第1条 この要領は、本市認定こども園及び保育所における就学前教育・保育の質の向上を図り、子どもの最善の利益に資するため、就学前教育・保育においてICT機器を活用するに当たり、その活用に係る各種検討等を行う委員会を設置するために必要な事項を定めるものとする。

(組織)

第2条 委員会は、次に掲げる委員をもって構成する。

- (1) 市立認定こども園及び保育所に勤務する施設長又は副施設長
- (2) 市立認定こども園及び保育所に勤務する保育士又は保育教諭
- (3) 市立認定こども園及び保育所を所管する部署に属する職員
- (4) その他委員会が必要と認める者

(協議等事項)

第3条 委員会は、主としてICTに係る次の事項について協議等を行う。

- (1) 市立認定こども園及び保育所における就学前教育・保育への活用に関すること
- (2) 事例紹介・研究に関すること
- (3) 研修に係ること
- (4) 制度・状況の共有に関すること

(開催)

第4条 委員会は、月1回程度開催する。ただし、開催については、委員会において開催回数等を調整することができる。

(その他)

第5条 この要領に定めるもののほか、委員会の運営に関し必要な事項については、委員会で協議して定める。

附則

この要領は、令和3年4月1日から施行する。

芦屋市立こども園及び保育所 ICT活用検討委員会委員

委員

| | | |
|-------|----------|------|
| 岡本知代 | 市立緑保育所 | 所長 |
| 池永直子 | 市立精道こども園 | 副園長 |
| 中本香代子 | 市立岩園保育所 | 副所長 |
| 古閑弘美 | 市立精道こども園 | 保育教諭 |
| 上野由佳 | 市立精道こども園 | 保育教諭 |
| 竹上和奏 | 市立精道こども園 | 保育教諭 |
| 樋口夏実 | 市立西藏こども園 | 保育教諭 |
| 菊樂真実子 | 市立西藏こども園 | 保育教諭 |
| 太田香菜子 | 市立岩園保育所 | 保育士 |
| 大澤静希 | 市立緑保育所 | 保育士 |
| 田口彩菜 | 市立緑保育所 | 保育士 |

事務局

| | | |
|------|---------|--------------|
| 伊藤浩一 | こども・健康部 | 主幹（施設整備担当課長） |
| 原田晴子 | こども・健康部 | 主幹（民営化担当課長） |
| 澤崎洋子 | こども・健康部 | ほいく課ほいく係長 |
| 林浩子 | こども・健康部 | ほいく課 |

（以上、順不同）

おわりに

令和4年度も新型コロナウイルス感染症により、保育環境は大きな影響を受け続けました。コロナウイルスによる様々な影響は、今しばらくは残り続けていくと思われ
ます。

今回のコロナウイルス関連の影響が落ち着いたとしても、パンデミックが起きる間
隔が狭くなってきているとのデータもありますので、今回の教訓を活かし、新たなパ
ンデミックに備えるということも、あながち先走り過ぎとも言えないかもしれません。

そういった点でICTの活用を考えるという視点もそれほどの外れではないように
思います。例えば「リモート」といった活用が考えられます。これはICT活用の一面
に過ぎないですが、活用を検討することで、また違う側面も見えてくるのではないかと
思います。

ICTの活用は、その意義を認め、活用する第一歩を踏み出すところに一番の難し
さがあると思います。

「変化」に対しては、身構えてしまうところがあります。それは、生存のための本能
なのかもしれません。しかし、「変化」にポジティブな姿勢で取り組めば、案外いける
ものです。

ICTの活用方法は自由です。これはダメ、あれはダメと妙に制限を設けることは
良くないと考えています。当然、数時間もタブレットを見続けるというようなことは、
避ける必要がありますが、保育者が一定の検討を行えば、そのようなことにはならな
いでしょう。

ICTの良さを保育に活用し、保育を充実させることは、認定こども園・保育所の
役割が充実し、それは子どもの最善の利益に繋がるものと考えております。

最後になりましたが、多くの方々にご指導・ご協力をいただきましたことに深謝い
たしますとともに、引き続きご指導等お願いいたします。

令和5年3月

芦屋市ICT活用委員会 委員 一同

